
蛍の光～新米同心3人衆の受難～

かれいど すこーぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍の光〜新米同心3人衆の受難〜

【コード】

N0386M

【作者名】

かれいど すこーぷ

【あらすじ】

同心佐倉一真は、去年から奉行所に勤め始めたいわゆる新米同心である。従姉妹の沙代に付きまとう影から沙代を守るべく護衛を引き受けるのだが……。

新米同心三人衆の第二段です。どうぞよろしくお願いいたします。

序幕 其の一（前書き）

結末まで考えてますので、ぼちぼち手直ししながら書いていきたい
と思います。

（大体10話前後で終わると思います）

なおこの小説の序章其の一は、後の伏線なのでさらっと流してもら
って構いません。

序幕 其の一

少年は大粒の涙をぼろぼろ流す

老人はその頭をやさしく撫でる

「師匠」

末期の水はあまりに冷えて

出づる涙はあまりに苦い

よおくおきき

わしらの仕事はまっつぐでなくてはならない

よがんだ物をつくっちゃなんねえのさ

そのためにはしかたのねえことだってたくさんおりのりこえなきやいけ
ねえ

けれどおぼえておいで

お前がよがんでしまったらがんばったってまっつぐなもんがつくれ
るもんか

老人は弱い吐息で咽込んだ

少年に最期の笑みをなげかける

けれど、もしよがんだら俺がまっつぐになおしてやる

よがんだところは全部俺がひきつけてやる

たとえ地獄の閻魔様を相手にしたって

お前の代わりに叱られてやるよ

少年は一つづなずくと涙を拭いた

序幕 其の二

突然の雨に沙代はかけだした。

先ほどまでの晴天がまるで嘘のように一面が厚い雲で覆われ始め、見る見るうちに大粒の雨を江戸の城下に落とし始めたのだ。雨はあつというまに乾いた地面に大きな水溜りをいくつも作り上げる。

沙代の行く手に大八車が見えた。

よほど急いでいるのか、かなりの速さで向かってくる。

沙代は走りながら道の裾へと避けた。

その時、目の端に動くものを捕らえた。

みると子猫が道の真ん中で心許なさげに震えている。

大八車は気づく様子もなくずんずん走ってくる。

このままではひかれてしまう。

沙代は思うが早いか道の真ん中に飛び出した。

同時にぬかるんだ道に足をとられ、道の真ん中で子猫に覆いかぶさるように転んだ。

「あぶねえ！」

大八車の男たちが止まろうと踏ん張った。

車輪が沙代の寸前でようやくとまった。

「ば、馬鹿やろう。気をつけやがれっ」

泥を被った沙代の頭の上から怒鳴る。

大八車は沙代を振り返りながら去っていった。

「あゝあ」

せつかくおろしたばかりの着物も、沙代の16になる愛らしい顔も泥水でぐしょぐしょだ。

手で払おうにもその手が汚れているので拭くことすらかなわない。

かたわらで「ミイ」と鳴く声がした。

「お前。無事でよかったね」

沙代は笑顔を取り戻し猫を高々と抱き上げた。

「ひとりぼっちなの？よかったら一緒においで」
そのまま猫を胸に抱いて帰る。

その一部始終をみている者がいたことに沙代は、ついぞ気づかなかった。

第一幕 佐倉一真の受難 其の一

同心、佐倉一真は布団の前で腕組みをしていた。

朝起きて顔を洗い、歯を磨いて、それから布団を上げるのが一真の習慣である。

その顔を洗うほんの少しの間に一真にちょっとした災難が起きていた。

まだ一真のぬくもりの残る白い布団に、これまた一段と白い小さな猫がとぐるを巻いてすやすやと寝ている。

「どついたらこの一瞬で眠れるのか」

災難の元に対して無表情で一真は言う。

無表情だがこれは一真の猫に対する最大の嫌味だ。

この男は能面の男という異名を持つほど表情をくずさない。

数日前にこの家に来た猫はもう一真を家臣とみなしているようだった。

一真は数日前のことを思い出していた。

数日前、家に帰るとすぐに父である佐倉時宗に呼ばれた。

時宗は神妙な顔をしている。

何か恐ろしい秘密を今にも話し出しそうな雰囲気だ。

齡43の佐倉時宗は去年の春、妻の死をきっかけに隠居した。真面目な性格と完璧な公務ぶりからその引退を誰もが惜しんだ。隠居後は敷地内に作ってある道場で子どもに剣道を教えたり、出張で旗本や大名の剣術指南もしている。

歳は取っているが刀を握る姿は雄雄しく、ご婦人方に人気が高い。

「実は、我が家に家族が増えることになった」

一真は身構えた。

再婚か？

母が死んで、公務もできないほどに落ち込んだくせに一年過ぎればもう心変わりか。

そう思った矢先、てててつと白い子猫が躍り出た。

一真の前で立ち止まったかと思うと腹を出してゴロンと仰向けになった。

「この子だ」

「はあ」

人間ではなかったので気の抜ける思いがした。

「先ほど沙代がきてな、この猫を拾ったと連れてきおった。男二人暮らしたと何かとむさくるしいし、癒しとして飼うことにした」

相変わらず笑いも怒りもせず神妙な面持ちで答える。
この男はこの顔が普通なのだ。

「癒しも何も。私は」

一真が反対するのをさえぎって時宗は言い切った。

「もう決まったことだ。なあ。みいちゃん」

神妙な面持ちは崩さずじゃれる猫をなでる。

「みい、ちゃん」

一真が聞き返す。

「みいちゃん、だ。良い名であろう」

時宗は深くうなずいた。

「叔父さん。あら、一真さん帰っていらしたのね」

沙代が佐倉家の戸を開けて中に入ってきた。

沙代は時宗の妹、佳代の娘であり一真にとっては一つ下の従姉妹だ。

一真の家とは向かいにあるため、頻繁に行き来がある。

「あの猫、どうしたんだ」

一真が静かに尋ねた。

「さっきの雨の中、大八車に引かれそうになってるところを助けたの。見たところ飼い主もいなさそうだし、つれて帰ってきちゃった」

「お前の家では飼えないのか？」

「叔父さんがいらないうって言えばうちで引き取るつもりだったのよ。でも、気に入っていただけみたい。よかった」

沙代は満足そうに言った。

なんてことをしてくれるんだ、と一真は心の中で悪態をついた。

以上が、数日前の出来事である。

沙代が作った赤い首輪をつけてご機嫌な子猫は、時宗や来客に愛想がよく受けがいい。

しかし、一真にとっては頭の痛い問題だった。

「一真、いるかあ？」

なおも布団の前で思案をしていると外で一真を呼ぶものがいた。

表へ出てみると、背の高い小綺麗な侍と、小柄で丸い狸のような侍が門の前に立っていた。

友人の清島安次郎と大堀兵庫だ。

兵庫は今にも笑い出しそうなのをこらえて丸い顔がさらに丸くなっている。

「お前、猫を飼い始めたんだってな」

ニヤニヤと笑いながら安次郎がきれいな顔で意地悪そうにいった。

一真は無表情で目をつぶりながらいった。

「今も困っている」

一真は猫が大の苦手であったのだ。

二人が上がりこむと猫はまだとぐろを巻いたままだった。

「かわいいなあ」

兵庫がつぶやいた。

来客に猫が気づいて布団から下りた。

安次郎と兵庫の前に、ててっと走りよるところんと仰向けになり歓迎のしるしをみせた。

「お前と違って愛想がいいな。名前は？」

安次郎が聞いた。

「みいちゃん」

再び陣取られないように急いで布団を畳みながら一真は答えた。

「ちゃん、までつけるかよ」

無表情親子の時宗と一真がみいちゃんと呼ぶ姿を想像して二人は腹

を抱えて笑った。

佐倉一真の受難 其の二

三人がなおも猫の話で盛り上がっていると、突然沙代が家に飛び込んできた。

「どうしたんだ、沙代ちゃん。泣いてるじゃないか」
兵庫がびっくりした顔で話しかけた。
沙代は一真の友人とも旧知の仲だ。

「ああ、兵庫さん。安次郎さんもいらしてたのね。誰かにつけられて・・・怖くってこっちに逃げてきたの」
まだ沙代の体は恐怖で震えている。

一真が表を確認しに行く。

「誰もいないぞ」

「いたのっ。私も直接見たわけじゃないけど、私が歩くと付いてくる足音がするの」

むきになって怒る様子を見ると確かなのだろう。

「追っかけられるような心当たりはないのかい？」
安次郎が聞く。

沙代は頭を振った。

「何にも。それに、今日だけじゃない。ここ数日ずっと続いているの」

そして身震いしながら話した。

「始めは、気のせいだと自分に言い聞かせていたわ。でも、足音はいつも家までついてくるの。それどころか今日は、走って追いかけてきたのよ」

怖くて振り返ることもできず一目散に逃げたが、足音は沙代のすぐ傍まで迫ってきたという。

「わたし、外に出るのが怖い。もう、一人じゃ歩けないわ
みいちゃんが、震える沙代の手に頼ずりする。」

あまりにも怖がっている様子を見て三人は顔を見合わせた。

「なあ、こんなに怯えてかわいそうだよ」
兵庫が顔を曇らせる。

「そうだな、それに一生外に出ないわけにもいかないし」
安次郎もうなずく。

「辻斬りの可能性もあるしな。しかたない、しばらく付き添ってやるよ。二人とも手伝ってくれるよな」
一真が二人に確認する。

「もちろん」

兵庫と安次郎はいった。

沙代はこれを聞くと、ぱっと明るい顔に変わった。

先ほどまで泣いて震えてたとは思えないほどの笑顔で一真に予定を伝える。

「明日は朝から寺子屋に裁縫を教えに行くの。帰りが夕暮れ時になるから余計に怖くて。そうだわ、竹林の中にある川が蛭の名所なの。少し時期より早いけどもしかしたらいるかもしれないわ。ねえ、そこに回り道して帰りたいの。」

きやつきゃとはしゃぐ姿にあきれながら一真は年下の従姉妹をたしなめる。

「あんまり調子に乗るなよ。お前が怖がっているから俺たちは仕方がなくつきあってやっているんだ。お前の遊びのことまで面倒見られるか」

威圧的な一真の態度に沙代はしゅんとなった。

見かねた様子で安次郎が言う。

「いいじゃないか、沙代ちゃんだって怖い思いをしてつらかったんだ。蛭を見るくらいつきあってやれよ。お前らが嫌なら俺が一人でつきあってやるよ」

安次郎が沙代の肩に手を添える。

兵庫がじろりと横目で見る。

親切な言葉の裏に野心が見え隠れしている。

安次郎は筋金入りの女好きである。

元服前から泣かせた女は数知れない。

一真達も、「安次郎病」と称してあきれられるほどだ。

一真は、従姉妹の違う危機を察して蚩狩りにもつきあってやることにした。

第二幕 子猫と少年 其の一

翌朝、一真達が沙代の家の前で待っていると、「おまたせ」と沙代が満面の笑みで出てきた。

親戚のあやめから貰った高価な着物を着てつつすら化粧までしている。

「どうしたんだよ」

一真が驚いて聞いた。

普段はこんなに着飾る娘ではない。

「どうもしないわよ。さ、いきましょ」

と楽しそうに歩き出した。

一真達は用心して周りを見渡すが、つけられている気配は今のところ感じられない。

少し安堵しながら一真は沙代の後ろを歩く。

そこへ安次郎が一真によってきて耳打ちした。

「沙代ちゃん、恋してるぞ」

「は？誰に？」

一真は聞き返す。

「見てりゃ分かるって、恋する女の華やかさが出る」

「だから誰にだよ？」

にやりと安次郎が笑う。

「そりゃあ、俺だろう。俺、もてるしな」

うんうんと、満足げにうなづく。

そんなわけがないだろう、と一真は心の中でつぶやいた。

しかし、沙代が浮き足立っているのは認める。

華やいでる様子も認めよう。

その恋とやらの相手は誰だ？

妹のような沙代の恋に一真は落ち着かなかった。

寺子屋まで何事もなく送り届け、一旦、一真の家に帰った。

3人はつけまわし犯が現れたときの対処を考えた。

万が一、犯人が現れた場合は、一真と安次郎が捕らえる役目を担う。その間に兵庫が沙代を家に送る。

怯えるといけないので沙代にはこのことは気づかれないように実行するつもりだった。

夕刻、沙代が出てくるより先に一真達は寺子屋の前でまっていた。

沙代は朝よりも幾分緊張した面持ちだ。
昨日追われたのは帰りだったからだろう。

それでも沙代は楽しそうに一真達と歩いていた。

やがて辻に差し掛かった辺りから一真と安次郎はついてくる影に気づいた。

隠れているつもりでも、夕日で長く伸びた影まで隠すのは容易ではない。

「丸見えだな」

安次郎が小声でささやいた。

一真は兵庫に目で合図を送る。

兵庫はうなずき、沙代を連れて振り返ることなく歩いていく。

それを見計らい一真と安次郎は角に潜む人間に近づいた。

子猫と少年 其の二

影は、一真達が近づいてくるのに気づくと慌てて反対方向へ逃げ出した。

「こら、また」

二人は走り出した。

影はしかし、角を2つ3つ曲がったところであえなく着物の襟首を捕まれる。

「なんだ、子供じゃないか」

拍子抜けした声で安次郎がいった。

坊主頭の子供はもがいて逃げようとするが、一真はそのまま体を持ち上げ子供の足は空を走った。

「はなせっ。はなせっ」

「どうして沙代をつけまわしているのか訳をいえ」

一真が静かな声で尋ねる。

「おいら、しらねえ。つけまわしなんてしてねえ」

「嘘つけ」

安次郎が鼻をつまんだ。

「ほんとだつてば。あの女の方は確かにおれの恩人だけど」

一真は子供をおろした。

「沙代が何かお前にしたのか」

子供はうなずいた。

「おいら三太っていうんだ。そこにある丸鐘屋で奉公してる」

丸鐘屋は主人一人でやっている小さな薬種屋である。

薬の調合がとて巧く隠れた名店だが、これまで奉公人を取ること
はなかった。

しかし歳を取って、いつまでも一人でやっていくわけには行かなく
なり、遠い親戚から跡継ぎをかねた奉公人をとることにしたのだ。

そこでつれてこられたのが三太である。

4人兄弟の三太は、最初のうちこそ辛抱強く奉公をしていたが、親
や兄弟のことが恋しくてたまらない。

主人は、親同然に優しく接してくれるが恋しさは募るばかりだ。

そんな三太は、ある日4匹の子猫が捨てられているのを見つけた。
兄弟のことが重なってみえて、つい連れて帰ってしまう。

優しい主人のことだから許してくれるだろうとも思ったのだ。

ところが、主人は猫を見るなり他の飼い主を探すように命じたのだ
った。

三太は悲しくなり、家族恋しさもあいまって我慢してきたものがつ
いに破裂した。

今まで弱音の一つも吐かなかった三太がぼろぼろと大粒の涙をこぼ

す。

そんな三太を見かねて主人が頭をやさしくなでた。

「わしらが作っているものは薬だ。余計なものが入ってしまったえば、薬は毒にもなるんだよ。もし作っている薬に猫の毛が入ってしまったって、それを猫でかぶれてしまう人が飲んだらそれこそ毒だ。たとえ、かぶれない人が飲むものだって余計なものも混ざってしまえばわしはそれを薬とは呼べない。それはものづくりの基本だ」

主人は続ける。

「わしらの仕事はまつつぐなものをつくらないといけない。人の命を預かるものだからな。それにはよがんだものは作ってはいけないんだよ」

三太は「まつつぐ？」と聞き返した。

「まつつぐってことだよ。ゆがんだものをつくっちゃならない。昔、仲の良かった櫛師のくちぐせだったんだ。さあ、わしも手伝ってあげるから」

主人が微笑んで、猫好きの常連客の名前を書き付け始めた。

三太は主人の書き付けを頼りに常連の客のところをいくつも訪ねた。

その甲斐もあり何とか三匹の引き取り手はついた。

しかし、残り一匹の引き取り手がどうしても見つからない。

困り果てて、辻で一休みしていると懐に入れていた子猫がいなくてに気づいた。

慌てて、元来た道を引き返し、探してまわるが見つけれない。

そのうちにひどい雨が降り出したのだ。

ずぶぬれになりながら探してまわっていると、先ほど休憩していた辻の真ん中に子猫が鳴いているのを見つけた。

「いた」

三太は駆け寄ろうとしたが、辻の横手の道から勢いをつけた大八車が来るのが見えた。

場合によっては、子供を引くこともある大八車は全く止まる気配がない。

このままでは猫が引かれる、そうは思っても足がすくみ動けない。

三太は物陰にしゃがみこんで耳をふさぎ、念仏を唱えた。

その時、沙代が飛び出したのだ。

大八車は沙代と猫の手前ぎりぎりで止まり、悪態をつくとすぐに去っていった。

泥だらけになった沙代は、優しく子猫を抱いて連れて行く。

三太は沙代に神様を見た気がした。

手を合わせて有り余るほどの感謝の気持ちのをせて沙代に拝む。

沙代の去った後には、きれいな朱色の櫛が落ちていた。

「きつとあの女の人が落としたんだ」

そう考えた三太はそつと懐に入れると、そのまま大事に持って帰ったのだ。

「おいらは、その櫛を返そうとしてあの人を追っていたただだよ。お待さんたちがいて怖いから、返しづらくて思わずついてきちゃっただけだよ」

三太は朱の色の美しい彫の入った櫛を取り出した。

「ここのところお店が忙しくて、外に出る暇がなかったんだ。だから今日になつちまつただけどこのまま持つてるわけにも行かないし」

櫛の歯をいじりながら三太がいった。

その櫛を一真が取り上げる。

「沙代のものじゃないな」

高価そうな彫を見た一真は一目見るなりそういった。

そんなに裕福ではない御家人では立派な櫛はもてない。そもそも櫛自体いくつももっていない。

「この餓鬼、適当なことやって」

安次郎が頭を小突く。

驚いたのは三太だ。

「そんなはずない。だって、他に誰もいなかったし泥も傷も付いていなくて、落としたばかりだったよ、あれは」

安次郎が一真に向き直った。

「親戚のあやめ様からいただいた下がり物でもないのか」

「あの人はこんな派手な朱は好まないからな」

一真は櫛を三太に返す。

「すれ違った大八車から落ちたのかもしれない」

三太はがっかりしている。

大事そうに持っていた様子からしても、沙代のものと信じていたことはわかる。

それにしても高そうな櫛だ。

普通の人間なら大騒ぎして探すことだろう。

落とした持ち主は番所に届けを出したり、見たものはいないか尋ね歩いたりもするはずだ。

そうなれば近所である三太の耳にも入ると思うのだが、三太の様子ではそんなこともなさそうだ。

表立って探せない理由でもあるのか？

そもそもこの子供はつけまわし犯ではなかった。

つまりは、なにも解決していないのだ。

嫌な予感がした。

「もし、もしもだ。この櫛を落としたのは大八車のほうで、この櫛を探しているとしたら。櫛を拾ったのが沙代だと思ひ込んでおいたら。そしてそれが、表立って探せないようなまずい理由があったとしたら」

一真がつぶやく。

安次郎が声を上げた。

「そうか、沙代ちゃんをつけまわして隙について櫛を取り戻そうとしているのかもしれない」

つけまわしは数日前から始まり、昨日は追いかけられたといっていた。

数日の間に沙代の行動が先読みできるようになり、ついに襲いかかったのではないか。

昨日は一寸のところで逃げきった。

だとすれば、今日もまた襲ってくるのではないか。

それも、昨日よりももっと確実なところから狙って。

「安次郎、急ぐぞ」

二人は三太を残し、沙代たちの後を追いかけた。

第三幕 蛍の光 其の一

その頃、沙代と兵庫は竹林の傍の川沿いを歩いていた。空はもうだいぶ暗い。

「一真さんたち、遅いわね」

水面を見つめながら沙代が言った。

途中で沙代は二人がついてきていないことに気づいた。

あまり不安がらせてもいけない。

家のすぐ近くにまで差し掛かり、もう本当のことをいってもいいだろうと思ひ、兵庫は犯人を今捕まえにいっている最中であることを告げた。

沙代はそれを聞いて驚き心配するが、兵庫が二人の強さを力説した。

「あいつらは江戸で一、二を争う剣の腕の持ち主だ。今頃つるし上げてぼこぼこにしてるに決まってる」

二人が剣の使い手であることは沙代も知っており、つけまわしの心配がなくなつたことには胸をなでおろした。

「よかつた。これで安心して蛍狩りができるわ」

沙代は兵庫に微笑むと軽い足取りで駆け出し、兵庫に「早く早く」と手招きをした。

兵庫は兵庫でどっぴりと安心しきっていた。

剣の腕前が下の下の兵庫は、つけまわし犯が刀を持たなくても勝て

る自信がなかった。

しかし、沙代を送ることにもう危険はない。

それに沙代の家までもう少しである。

ちよっと沙代の蛭狩りに付き合ったら後は一真に飯でも奢ってもらおう。

そんなつもりで呑気に構えていた。

そのため、兵庫は自分達をつけてくる怪しい影に全く気づかなかつたのである。

竹林と道を挟んで土手がある。

土手には草が茂り、上ったばかりの月が水面にきらきら反射する様子が草の隙間から見える。

時々草の露に反射する光に惑わされるも、蛭はまだ出ていない。

「まだ、蛭には早いようだね」

苦笑しながら兵庫が言った。

「そうかしら。一匹、二匹は出てくるかもしれないわ。ちよっとまってみましようよ」

そういつて、沙代は手を後で組んだ。

心なしか鼻歌まで歌っているようだ。

「沙代ちゃんは蛭が好きなんだね」

「大好きっ」

沙代はそういつた後、はっとしたように顔を赤らめた。

こんな可愛い妹がいればきつと毎日楽しいだろうな。
と、兵庫はその様子を楽しそうに眺めていた。

ふと、足音が近づいてきた。

「一真達かな」

兵庫は2、3歩足音のほうに歩いていく。

竹の陰になって誰かは分からないが、男が二人こちらに小走りに歩いてくるようだった。

「おい、こつち・・・」

呼ぼつと声を上げかけた兵庫は口をつぐむ。

二人の男の顔が竹の陰から出て月明かりにさらされる。

「誰？」

兵庫は小首をかしげた。

螢の光 其の二

二人の男は町人のようだった。

しかし無精ひげが生えて髪も手入れがされておらずどうみても真っ当な人間には見えない。

手元には、長鳶口と小刀をそれぞれ持っている。

兵庫は、沙代を背にして刀を抜いた。

「何者だ！」

緊張のあまり声が裏返る。

向けた刀の先がわんわんと震えている。

「お待さんに用はねえ。そちらの女を渡してもらおうか」
沙代を欲しがる言葉でつけまわし犯だと感づいた。

話が全然違うじゃないか。

なにしてるんだよ、一真も安次郎も。

心の中で二人に悪態をつく。

それでも沙代を守ろうと男たちに斬りかかった。

「やあっ」

上段の構えから大きく刀を振り落とす兵庫。

男たちは一瞬ひるむ。

しかし、振り落とした先に斬れるものは何もなかった。

どう目測を誤ったものか、男との距離は一問近くも離れている。空を切り、振り落とした刀の先は地面に深々と突き刺さり、弾みで兵庫の体は宙に浮きあがる。

「ひえええっ」

叫びながら、兵庫はくるんと一回転して男たちの間に背中からどすんと落ちた。

男たちは一瞬何が起きたかわからず呆然としたが、兵庫が起き上がらないことを確認すると、沙代を土手の草むらへと連れ込んだ。

「やだあつ。放して、放してっば」

男たちは必死に抵抗する沙代を押し倒し体を押さえつけた。

「櫛はどこへやった」

男の一人が沙代に言う。

「櫛？知らない。何のこと？」

沙代はもちろん櫛のことは知るはずはない。

「とぼけんなよ。朱の櫛だ。雨ん中、お前がもっていったんだろっ」
男たちは沙代の髪を掴んだ。

「本当に知らないっば」

悲鳴にも似たような声で沙代は言った。

「だったら、いつもは通らねえくせに何でこの場所にきたんだ。わざわざお侍を連れてきてよ。知ってんだろっ」

男たちは沙代の首に小刀をあてて脅す。

ここに来たことも偶然のことだし、兵庫は護衛のためについてきただけだ。

沙代は泣きながらそのことを訴えるが、男たちは聞く耳を持たない。

「くそつ。いやまてよ。今、櫛を持つてるかもしれねえ。探せ」

そういうと男たちの無骨な手が沙代の体を調べ始めた。

手が沙代の懐に入る。

小袖の中も調べられる。

帯の間にも、着物の裾もめくって男の手が入ってくる。

「いやあ！やめてえっ」

沙代はありつたけの声で叫んだ。

「しずかにしねえかつ」

慌てて男たちが口をふさいだ。

そのとき、男たちは周りの虫の音がしなくなっていることに気付いた。た。

そればかりでなく、周りの空気がひんやり冷えていくのを感じていた。

「何だあ？」

男たちは急に不安に襲われ辺りを見渡した。

振り向くと、そこには青白い怒りの気を発した一真が刀を抜いて立

っていた。

「ひいつ」

恐ろしい剣幕の一真に二人の男は逃げ腰となる。

「お手柔らかな。といいつつ俺も手加減できるかどうか・・・」
薄ら笑いながら安次郎も血管を浮き上がらせてその傍に立つ。

敵う相手じゃないと本能的に悟った男たちは、散り散りに逃げ出した。

一真は男の一人に切りかかった。

尋常じゃない速さと、殺気をみた男は固まって動けない。
刀の切っ先が男の着物の脇を突き破った。

そしてそのまま刀は廻りに生えていた竹に突き刺さった。

刺された瞬間、男は一瞬死を覚悟したが、着物は身を傷つけることなく貫通しており、無傷であった。

しかし、ほっとしたのもつかの間、男の体は竹に釘付けにされてしまい身動きが取れない。

目の前には、錯乱するくらい強い殺気を放つ一真がいる。

恐怖で引きつる顔に向かって一真は拳を振り下ろす。

「ぐわっ」

男の悲鳴が竹林に響いた。

安次郎は安次郎でもう一人の男を追いかけ、襟首を捕まえるとぐい
っと引き倒した。

男は、派手に地面に転がる。

すかさず安次郎も馬乗りになって取り押さえた。

「い、命ばかりは・・・」

馬乗りになられた男はすでに戦意を失っている。
獲物を捨て、拜むように手を合わせる。

ふいに、安次郎が刀を地にさした。

「貴様なんぞで刀を汚してたまるか」

指をぼきぼき鳴らして、拳を見せ付ける。

「お、お助けをっ」

情けない声を出した男の顔を歯が折れるほどに殴った。

沙代はその騒ぎの中、這うようにして水辺のほうへ逃げていた。

土手の上では相変わらず殴る音と悲鳴が響いているというのに、水
面は月をゆるゆると映すくらいに穏やかだ。

なおも、水辺に近づいていくと光るものが見えた。

黄緑の淡い光である。

「蛍？」

しかし蛍にしては飛ぶわけでもなく、光も弱い。
水の縁に集まってじいっとしている。

「何かしら」

沙代はぐつと身を乗りだした。

淡い黄緑の光が集まっている水辺には小さな島ができていた。

だがその小島が何でできているのかは暗くてよく見えない。
水の流れにゆらゆらとゆれているようにも見える。

「石ではなさそうだけど・・・」

沙代はさらにそれを見続けた。

黄緑の光の先にはもぞもぞ動くものがあった。

貝の群れのようだ。

さらにその貝の先をよく目を凝らしてみると・・・。

「ぎゃああああああ！」

夕暗闇の中につんざくような沙代の悲鳴がこだました。

その声を聞いて、殴られていた男たちは何かをあきらめたかのよう
に放心した。

「おい、沙代。大丈夫か」

一真があわてて川辺に向かうと、沙代は硬直するよつに気絶してい
た。

それからは大騒ぎであった。

沙代が川辺で見たものは半分腐乱した女の死体であった。

その見分や捕らえた男達の聴取で三人は1日中、目の廻るような忙しさだった。

第四幕 まつつくなもの 其の一

捕らえられた二人の男は、やはり町人であった。

一人は大工、もう一人は櫛師である。

もつとも今は二人とも仕事についていない。

大工の男は与作、櫛師は伊造といった。

「あつしら、たしかに悪いことはしました。けれど、殺そうと思って殺したわけじゃあなかったんです」

与作は堪忍したらしく、女の死体のいきさつについて話し始めた。

死体の女は、博打の元締めであった。

派手な女でたいそう羽振りもよかった。

博打に負けた分はその女が気前良く貸してくれる。

博打にのめりこんでいた二人は女から借金を重ねて、あつという間に稼ぎじゃ手の届かないほどの額に達してしまった。

しばらくすると、女は手の平を返したように取立てを始めた。

仕事に取り立てにきたり、家の前で待ち伏せたり、近所に触れ回ったりと容赦がない。

それだけでなく、少ない稼ぎを全部渡しても利息だなんだといって、肝心の借金は元のまんま減ることがなかった。

そうこうしているうちに女のやり口はどんどんひどくなっていった。

夜中に押しかけ大声で怒鳴ったりするので、近所からも白い目で見られるようになった。

拳句の果てに長屋からは追い出され、仕事も暇を出されてしまう。

「あまりにもひどすぎる」

自分でまいた種とはいえ家も失い仕事もなくなり二人は途方にくれた。

かくなるうえは、逃げるしかない。

そう思った二人は、できる限り遠くに逃げる算段をした。

しかし、逃げるにしても金はある。

それに女にやられっぱなしというのも癪だった。

「あの女に一泡吹かせてやろうぜ」

櫛師の伊造は策を立てた。

あくる日、二人は酒と金を持って女のところを訪れた。

「言われる前から持ってくるとはいい心がけじゃないか。ご丁寧に酒まで持ってくるとはね」

女は上機嫌でそれを受け取り、二人はそのまま女の家に入りこんで勺をした。

もともと酒が好きで女は二人のおべっかにもすっかり気持ちがよくなっつがれるままに飲み続ける。

一刻ほど飲み続け、すっかり酒瓶は空になってしまった。

酒がなくなると女はいびきを立てて寝込んだ。

二人はこのときを待っていたのだ。

与作と伊造は女の脇をそつとすり抜け、家財の物色を始めた。寝込んだ女の懐から財布を取り出し金もとった。

長持ちから、高価な衣装や小物を選別し、風呂敷に包む。

「そろそろいくか」

もてるだけ持つと二人は逃げる準備を始めた。

慎重に間口へと向かうがその途中、女の異変に気付いた。

先ほどまで大きないびきをかいていたというのに、今はまるでその音がしない。

不安になり様子を見てみると、女は土色の顔をしている。

「おい、まずいんじゃないか」

慌てて女の脈や息を確かめるが、全く音がしない。

「し、しんじまった！」

強い酒だったせいなのか、女の体が限界まで壊れていたのかわからないが、とにかく女は戻らぬ人となってしまう。

これは、大きな誤算だった。

人が死んだら追っ手が嫌というほどつくはずだ。そうなれば、やすやすと逃げられるはずもない。

二人は頭を抱えた。

考えた末、二人は女の死体なるべく見つからないように川に捨てることに決めた。

川ならば酔った上の転落事故ととられるかもしれない、そういう期待もあつた。

都合よく雨も降り始め、人通りはまばらだ。

「よし、いこう」

大八車に女の死体と盗んだものを乗せて、上から筵を被せる。

そして、人気のない道を選びながら大八車を押した。

途中で人が飛び出してきて車を止めることはあつたが、なんとか川辺まで怪しまれずに付くことができた。

水の中へ女の死体を捨てて、もと来た道を引き返そうとしたときだった

「ねえ！櫛がねえ」

伊造が盗品の一つだった櫛を探して騒ぎ出した。

「櫛くらいどうだっていいだろう。それで足が付くわけでもないだろうし」

与作がそういうと、伊造は首を振る。

「足が付くかも知れねえ。あれはこの江戸でも一番腕の良かった櫛師の一点ものなんだ。俺がそこで奉公していたときにもらったものだ。見る人が見ればすぐわかる。それで俺にたどり着くにちげえね

え。しかも、姐さんにこの櫛を取られたとき、姐さん、自分のものだって大層自慢してふれまわってたもんな。あの櫛だけはぜってえ、取り戻さないと」
伊造は言った。

二人は、もと来た道を戻ったが、櫛はどこにも落ちていなかった。考えられるとしたら、ぶつかりそうになったときである。

あの時は随分踏ん張って車を止めたから、何か落ちてしまっても不思議はない。

しかも、ぶつかりそうになったのは女だ。

女なら落ちている櫛をねこばばすることだってありえるだろう。

二人は、翌日からその辻で沙代を探し始めた。

沙代はあっさり見つかった。

しかし見つかったはいいが、武家の娘なので迂闊に手も出せない。

男たちは隙を見つげるために毎日つけまわした。

この前は襲えると思えば追い掛け回したが、すんでのところで逃げられた。

そうこうしているうちに昨夕、侍を連れて竹林に入っていくではないか。

二人は焦った。

自分たちがあの川に死体を捨てたことがばれたのであったのである。

幸い侍は一人である。

二人で得物を持ってはなんとかなるだろう。

そう思った二人は、兵庫と沙代を襲いにかかったのである。

それから後のことは、一真も良く知っている。

全てを話した与作は、自分の罪の重さを認め覚悟を決めたようにうなだれた。

しかし、その一方で櫛師の与作は口をつぐんだままだった。

まっつぐなもの 其の二

もう一人の男、伊造は与作のように素直ではなかった。事件のことは何もしゃべろうとしない。

特に櫛については与作も知らないことなので、埒が明かない。

「そつえば、櫛は今どこにあるんだ」

ふと一真は三太のことを思い出した。

あの時、返してしまった覚えがある。

一真は三太に櫛を持ってくるように使いを出した。

大番屋に呼ばれた三太は櫛を手不安げにやってきた。

「三太、こつちだ」

一真が奥へよんだ。

「お侍さん、この櫛、おいら、師匠に見せたんだ」

三太の言う師匠は丸鐘屋の主人だ。

「そしたら、この櫛を作った人は友達だったって懐かしそうに見ていたよ。それで師匠からことづけを預かったんだ。この持ち主の人に合わせてよ」

三太は言った。

牢の格子の向こうにいた伊造は三太を一瞥すると無愛想に言った。

「餓鬼がなんでこんなところにいるんだよ。どっか連れて行け、目ざわりだ」

ぎんと三太を睨みつける。

三太は怖気づく様子もなく格子に手を突っ込んで朱色の櫛を渡した。

「これ……。お前が持ってたのか」

自分の勘違いに気付いた伊造から乾いた笑いが起きた。

「よがんじゃいけねえ」

三太は伊造に言った。

伊造は目を見張った。

「お前がよがんでしまったらがんばったってまっつぐなもんがつくれるもんか」

三太がまた言った。

「お前、その言葉どこから」

伊造は声も出ないほどに驚いている。

「おいらの師匠が、伊造さんに伝えろって」

伊造は名前を呼ばれ、ますます驚く。

「この子は丸鐘屋の奉公人だ」

一真が三太のことを付け加えた。

「丸鐘屋。そうか。師匠の飲み仲間の丸鐘屋か」

やっと合点がいった顔をした。

「よがんじゃいけねえ。忘れていたよ。何でだろうな。大事な言葉だったはずなのに、いつから思い出さなくなっただらうか」

伊造はじつと櫛を見ていた。

「坊主、主人はいい人かい？」

伊造は三太に向き合った。

三太は「うん」とうなずいた。

「言うこと聞いてちゃんと奉公するんだぞ」

格子の向こうから手を伸ばし、三太の頭をぐりぐりなでた。

そしてこの一件から伊造は素直に聴取に応じるようになった。

伊造の師匠は腕の良い櫛師だった。

弟子は取らない主義だったが、素直で熱心な伊造のことが気に入り唯一弟子にしたのだ。

しかし、修行の道半ばで伊造の師匠は病気にかかる。

助からないと宣告された死の間際、伊造は師匠の枕元に寄り添った。師匠は最期の教えを伊造にといた。

「お前がもしよがんだら俺がまっつぐになおしてやる。そんで、お天道様に言えねえよなよがんだとは全部俺がひきつけてやろう。あの世で俺が閻魔様に叱られてやるよ。伊造よ、まっつぐ生きるよ」
そういって頭をなでてくれた。

その翌日、息を引き取ったのだ。

その後の伊造は、別の櫛師のもとへ奉公に出るが、折り合いが悪かったり、師匠の腕と比べてしまったりで奉公先を転々として、次第

にまつすぐな道から外れ始めたのである。

そこまで話すと伊造は櫛を見つめた。

「この櫛は、師匠の一世一代の彫りだったんです。師匠は誰にも売らずに、おいらに形見として分けてくれた。どんなに貧乏してもあの櫛だけは手放さずにいたんです。それなのに」

ある日、借金取りに伊造の家を訪れた女は、勝手に伊造の家財を漁り、その櫛を見つけてしまった。

「堪忍してください」

伊造は取りすがったが、女は櫛が気に入り返そうとしない。

「あんたが、借金するねえからいけないのさ。それにこんなきれいな櫛じゃないか。使ってやらないと勿体無い。悔しけりや借りた金足を揃えて返しやがれってんだ」

そついいながら、女は自分の頭に櫛をさす。

満足げに帰っていく女の後姿を見ながら、伊造は唇をかんだ。

「あの女の頭につけられた櫛を見たとき、改めて憎たらしく思ったんです。師匠が懇親の力をこめて作ったものを、真つ当ではない女に真つ当ではない理由で使われる。本当なら大名や旗本の姫様が使うほどの櫛です。俺は師匠の最後の仕事に泥を塗られたと思ってしまいました。馬鹿です。師匠に泥を塗ったのは道を外れた俺だったのに」

その怒りも手伝って、櫛を取り返すために盗みに入ったのだ。しかし、事の顛末はその櫛のせいで全て狂ってしまった。

「この櫛が落ちたのは、師匠がよがんだ俺をまっつぐになおすためだったのかもな。あのまま、逃げていたら俺は死ぬまで腐った人間でいた」

堪えていたものがみるみるうちにあふれてくる。

「どうして、師匠の言ったとおりまっつぐ生きなかつたんだ。何で博打なんか、何で借金なんか。何で、何で人殺しなんか！」
伊造は声を殺して泣いた。

「畜生、畜生！なんでだよ」
まるで戻らない時間を打ち据えるように拳で床を何度も打った。

後日、二人に沙汰が降りた。
二人は佐渡に送られる。

窃盗殺人は大きな罪だが、女にも賭博の容疑がかかっており清廉潔白ではない。

女の罪も考慮されて二人は死罪だけは免れた。

「師匠、俺の罪を少し被ってくれたのかもなあ」
裁決が下りた時、伊造は天を仰いでそういったという。

終幕

仕事を終えた一真は家に帰っていた。

ふと、沙代が気になり、向かいの従姉妹の家に行く。

「沙代、具合はどうだ」

昨夜、女の死体を見た沙代は食事も喉を通らないほどの衝撃を受けて落ち込んでいた。

大好きな蛍の下に死体である。

普通の女ならば当然そうなるだろう。

一真は沙代に慰めるつもりで話しかけた。

「沙代、あれは蛍ではないよ」

沙代が一真のほうを向いた。

「正確には蛍の幼虫だ。それも死体が目的のではなく、それに食べに集まってきた貝を食べるために集まっていたわけで・・・」

沙代は一真の無神経さにギッと睨みつける。

それ以上何もいえなくなった一真は沙代のそばでなすすべもなく正座していた。

沙代はため息とともにつぶやいた。

「私、しばらく蛭は見なくていいわ」

向かいで男の声がした。

「兵庫達がきたみたいだな」

一真が自分の家に戻ろうとすると、「私もいく」とあわてて沙代も後を追いかけた。

二人の友人は門の前に立っていた。

その後には三太の姿があった。

「猫を見せておくれよ」とはにかみながら言う。

「どなたかしら？」

沙代は首をかしげた。

「あの猫の拾い主だよ。沙代があのだで拾うまではこの子が連れていたんだ」

一真が説明した。

「まあ。あの子の恩人なのね。叔父さんも気に入ってらっしゃるし、とっても可愛い子で私たちもうれしいわ」

沙代は手を合わせて喜んだ。

家に入るなりみいちゃんは走りよってきて、ごろんと腹を見せた。

「お前、よかったな。こんな可愛い首輪もつけてさ。お待さんのお家で飼われてうらやましいや。強い立派な猫になれよ」

三太が猫をなでながらいった。

「ねえ、名前はなんていうの。お侍さんの家だからきつと強い名前だろうな。とら、とか鉄、とかさ」
うれしそうに三太が尋ねた。

「みいちゃん」

一真は無表情で答える。

「みい、ちゃん？」

「みいちゃん、だ」

やはり表情を崩さない一真をみながら、三太は微妙な顔をした。

三太が家に帰った後、三人の同心たちは昨日の話を始めた。

「しかし、兵庫は役立たずだな。どうやったら地面と戦って伸びてしまっただよ」

安次郎がけらけら笑った。

「笑うなよ。大体、安次郎たちが取り違うからだろ。しくじったのはどっちだよ」

兵庫が反撃する。

「お前にしくじりなんていってほしくないな。刀を持っている武士が町人に負けるなんて恥ずかしいことだぞ。俺が稽古をつけてやるうか」

一真がそついうと、兵庫は露骨に嫌な顔をした。

「お前、友達だって本気で殺しそつなくらいの殺気を出すから嫌だ」

そこへ、お茶を淹れた沙代がやってきた。

「兵庫さんをあんまりいじめないでよ。竹林で守ってくれたときは、それは頼もしかったんだから」
そう口を挟む。

「その後すぐ伸びて沙代ちゃんが悲鳴あげるまで起きてこなかったんだぜ、こいつ。どこが頼もしいんだよ」
安次郎が兵庫をこづく。

「その場にいなかった人にはわからないのよ。安次郎さんは兵庫さんを見くびりすぎてるわ」
沙代がぶうつとふくれた。

一真はその様子を見て、ひよつとして恋のお相手は兵庫か、とちよつぱり複雑な気持ちを抱えながら茶をすするのであった。

みいちゃんが、一真の傍らで腹を出してすやすや寝ている。
いい気なものだ脅かしてやろうと刀に手をかけた瞬間、沙代の冷たい視線に気付き罰悪く刀をしまう。

道を踏み外したとき果たして自身でそれに気付くのだろうか。
それを気付かせてくれるのはきつとたまたま傍らに立つ他人たれかなのだろうか。

そんな人が傍にいて。
いや、傍にいらなくてもどこか遠くからでも見守ってくれている人生というのは、たとえつらいものでも案外幸せなのかもしれない。

一真は思いながら、悪友と従姉妹のおしゃべりの輪に再び加わった。

終幕（後書き）

おつきあいいただきましてありがとうございます（＾ー＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0386m/>

蛍の光～新米同心3人衆の受難～

2010年10月8日12時23分発行